

# 加舎白雄同名異人考

矢羽勝幸\*

## 1. 緒言

“天明中興俳諧の五傑”と称された加舎白雄は生前、昨烏・白尾（坊）・白雄（坊）・春秋庵の4つの雅号を使用しているが、これと同じ号を名乗る俳人が、白雄の生前、没後に何人か居り、しかも従来の研究の中にはこれらを白雄本人と混合した例もあり、まことに煩わしい。ここでは庵号を除く他の3つの雅号の同名異人を紹介、検討し今後の白雄研究の資にしたい。

## 2. 白雄号

加舎白雄と活動期を同じくする同名異人が越中にいた。越中富山の俳人加興が明和7年（1770）に刊行した『俳諧本来道』付篇（同時代人の作品集）冬の部に、

餅花の盛久しきためし哉 白雄

の一句がみえる。同書に入集する大部分の作者にはそれぞれ出身地を示す地名の角書きがみえるが右の作品には記されていない。同書における地名無記のほとんどは越中であるからこの白雄も越中の人と考えてよいだろう。さてこの人物は『蕉門俳書目録』（橋屋治兵衛編・天明頃成立）によると『越の時雨』（1冊）なる俳書を刊行している。いまだ同書は未見だが『東京大学総合図書館連歌俳諧書目録』によると享保20年（1735）二川門人等編となっており上記の白雄は越中富山の蕉門池田二川（享保20年没）の門人であり、本書は二川の追善集であることがわかる。とすれば、『俳諧本来道』の作品はごく晩年のものとすべきだろう。享保20年は、加舎白雄の生まれる3年前に相当するから大体加舎白雄の父親ぐらいの年令ではあるまいか。ちなみに明和7年当時加舎白雄は、昨烏、白尾を称しており、いまだ白雄号は名乗っていない。越中の白雄がいつ頃他界したか未調だが明和、安永期の俳書閲覧の際には注意を要する人物である。

越中の白雄よりやや早い時期甲斐にも白雄号を名乗る別人がいた。奇矯鄙陋の句風として俳諧史上悪名の高い立羽不角の前句付高点集宝永4年（1704）刊行『一騎討』下巻（半紙本一冊）宝永4年11月1日分に次の一句がとられている。

舞台飛傘ハ音羽の網懸鷹 甲州 白雄

この白雄については目下のところ上記の資料しかなく、詳細は不明である。

同じく信州の雑俳集『奉納信州別府三十番神』（願主梅花堂・歌風評・寅八月吉日刊・会林花蝶軒・注1）に松本の同名異人の作品がある。刊年は不明であるが雑俳集の体裁等より考えて天明をさかのぼるものであることは疑いない。作品は忠臣蔵に取材している。

石塔も大石割て四十七 松本 白雄

加舎白雄没後、同号を名乗る俳人は6名ほどいる。

---

\* 一般科 講師

原稿受付 昭和61年9月27日

文政2年(1819)雪中庵派の鴨北元がその師岩波午心のために編んだ追善集『錦袋集』(半紙本1冊, 30丁)に越後の白雄が顔をみせる。

合飲の朶の軒端さびしや玉祭 越後高ナシ 白雄

高ナシ(梨)は現在の小千谷市のうちである。上記の句は午心への悼句であるからこの白雄は午心門下と考えてよいだろう。

文化から文政にかけて、江戸にも白雄号を名乗る俳人が2人ほどいた。文政3年(1820)銚子の俳人大里桂丸の編んだ『椎柴』(白雄門の今泉恒丸, 素月尼夫妻の追善集。半紙本1冊)“武蔵”の部に次の1句をみせる。

薬草の野にかをりけりくもの峰 白雄

文政4年(1821)江戸の二世秋瓜門人六草庵仙瓢が刊行した歳旦帖『辛巳歳旦 六草庵』(半紙本1冊・20丁)にも地名無記(江戸の意)で白雄の作品が3句(歳旦吟1, 春興吟2)ほど入集している。

元日も初むかしかな天下茶や 白雄

葛飾ハ遠山のミぞ揚雲雀 同

鵲も巢に春を待たぐみ哉 同

出句のあり方からみてこの白雄は純粹な仙瓢門下と考えられる。

時代は前後するが文化12. 3年(1815~6)頃, 栄寿堂より発行された一枚刷り俳人番付「正風俳諧名家角力組」の東方5段(最下段)13人目に「エド 白雄」の名がみえる。当時江戸麻布には榎本星布後援のもとに二世白雄房昨烏を名乗った人物(後述)もいた。上記『椎柴』所載の白雄も麻布の二世の気配が濃厚である。仙瓢門の白雄と麻布の白雄とは別人であろうが「正風俳諧名家角力組」に出る白雄はその知名度からみれば麻布の白雄とするのが妥当であろう。

天保7年(1836)刊行の『俳諧人名録』初編上巻(惟草編・中本1冊)に江戸神田鍛冶町に住む年々庵梅雪の記事がみえるが、この人物もまた白雄房を名乗っている。

年々庵梅雪 鶴啼て正月めかす田面かな  
笠脱で見れば事なし閑子鳥  
女郎花ふかき風情もなくぞさく  
ゆくとしや言も尽さぬものの恩

東都神田鍛冶町 号白雄房

年々庵は加舎白雄の高弟で白雄の没後しばらく春秋庵を継いだ(葛三の後継承し, 再び葛三に返上している)婦童(のち其堂)の庵号である。詳しい履歴は不明だが、号のあり方から考えて麻布の白雄同様加舎白雄の俳系につらなる人物であることがわかる。

天保7年より下ること10年, 弘化3年(1846)春魚編の『自認通称千家集』(中本3冊)3巻に伊勢の白雄の伝を紹介している。

かざす扇江の島かげの移けり 白雄

北勢東海道筋泊りのさとの住。一号守口庵。通称清水伝兵衛  
筆蹟も加舎白雄によく似ているからこれは明らかに白雄の名声にあやかっただ号である。もともと伊勢地方は加舎白雄の門人の多かった土地である。

以上管見における白雄号の俳人は本人を除いて9名の多さを数えるが、俳人以外にも寛延

3年(1750)10月、越後柏崎の鐘ヶ淵へ入水自殺をして近隣に話題をまいた同地西光寺住職白雄上人(注2)などがいて混同されやすい。

### 3. 白 尾 号

加舎白雄が「白尾」の号を使用したのは、鳥明に入門した明和2年(1765)以降安永5・6年(1776~7)頃までで、安永3年にはすでに「志ら雄」(注3)を称し、「志ら雄」「白尾」「志ら尾」を2・3年間併用していた。白尾の号は、最も信頼していた師白井鳥酔が特に命名してくれたものといわれるが、季語にもある「白尾の鷹」がその出所と思われる。青年時代の覇気溢れる白雄にとってまことにふさわしい雅号といえよう。

同じ白尾号を名乗る俳人が2人ほど確認される。ただしこの2人は、同一人物である可能性もある。まず、其日庵白芹による葛飾派一門の歳旦帖『丁卯元除遍覧』(文化4年刊・半紙本1冊・95丁)の巻末に近い部分に次の1句が載っている。

正月や昼過比の人しづか

白尾

この作品の前後は、葛飾派と比較的親しい関係にあった雪中庵派・宗瑞派・太白堂派等の作品が列記されており、この白尾が葛飾派以外の俳人であることを示している。特に地名の角書きがみえないところをみると江戸の俳人と考えてよいであろう。ちなみに白尾の後に、万化・桃原とともに発句を寄せる一茶は、当時すでに葛飾派の埒外にあり、遊星的な存在であった。

けふへとて垣の小すミも若菜哉

一茶

『一茶全集』に洩れた新出作品である。

文化10年(1813)大阪の七五三長斎編の『万家人名録』(大本5冊)4編に江戸の俳人として白尾を紹介している。前述の白尾と同一人かどうかは不明である。

白尾 姓三間、俗称弥兵衛。皇都之産、今在于東都大円。

能延る三輪素麺や春の風

ちなみに加舎白雄と同時代の知名人に白尾国柱(1762~1821)がいる。塙保己一・村田春海門の国学者で、鹿児島藩の記録奉行となった人だが、白雄との交渉はもちろくない。

### 4. 昨 鳥 号

昨鳥号の使用は、前述「白尾」号とほぼ同じで「白尾坊昨鳥」と組んで使用した例も多い。鳥の一字は師鳥明から譲られたものであろう。

昨鳥の同名異人は2名。1人は白雄の生前ないし同時代人。もう1人は前述の俳人番付に登場した二世白雄房昨鳥で、この人物が今日最も混同されやすい。白雄房昨鳥が俳諧史に登場するのは、加舎白雄の17回忌に当る文化4年(1807)にその遺著『俳諧発句五百題』(小本2冊)を刊行した時からである。本書の序文は白雄の高弟八木澧水と二世白雄房昨鳥、跋は白雄門の関秀榎本星布である。白雄房昨鳥なる人物と高弟澧水・星布の関係を知らうえからも序跋3文を次に転載してみよう。

#### 序

和歌に類題集あり。亦題林愚抄あり。いま爰に誹優の書数多ありといへども四季の雑物、

去嫌の事のミにからまりて句意の浅深強弱、虚実眼前過去のさまに不抱、唯其題を探て当座の趣に迷えり。発句は三日諫て而後に時の師に問べし。如何してか元録の調をおこさむ事を思ふより屢その意を窺に風光の沙汰のミ区にして句意の新古差別なく只流行におくれじとなむいへる事世に聞ゆ。誠に万代不易の体を考える心意より起てハ古調の捷をまもり楽こそいと風雅ともいふべき也。然あれバとて予が先師や春秋庵白雄居士古人の発句を拾ふて野守が鏡となさむが為に五百題の句集を撰ミおかれしを今年哉十有七霜の追幅のために現す。依て以て月を経星をかぞへて此集に遊ぶ、自から古調を得む事を思ふて則さくら木に縷、葛かつら跡永く風光せむことをおもふ。

于時文化丁卯歳秋

白雄房昨鳥誌 ㊦㊦

この書やうつしまきにてつたはりけるも今年や昨鳥ぬしの板にえりてすりまきになしたるいさおしをさをさしきことをやつがれひとくだりくわへ侍りぬ。

あがたの澧水 ㊦㊦

## 跋

春秋庵白雄亡師撰集の五百題や今年十有七霜の追幅の為によてふた世の昨鳥うし梓に鏤けるを懐にして予が草の庵に訪せ給ふによて末書てうものをなす。此道に遊給える人ハ葛かつら跡ながく慕ひ給はむ事をおもふ。

松ばら庵星布 七十六 ㊦㊦

昨鳥は自ら「予が先師や春秋庵白雄居士」と記している。そして白雄の高弟2人までがこれに添え書きして本書の刊行を助けている。澧水・星布が援助したということは、昨鳥は事実白雄門下であった可能性が強い。しかし、俳名、庵号継承のうるさかったこの時代に、加舎白雄に紛らわしい「白雄房昨鳥」という雅号をよくも許されたものである。また誰の許しを得たのだろうか。

『俳諧発句五百題』の刊行された翌年文化5年(1808)閏6月20日に白雄門の最長老といわれた信州埴科郡戸倉の宮本虎杖が、前記相模の同門八木澧水に次のような手紙を送っている(注4)。

澧水 詞 宗 几下

虎 杖

暑中先御無難ニ御凌と奉遠察候。野も不相替俳用勤候間御休意可被下候。扱、集(私注・白雄追善集『犬樞集』)も漸出来御無心(私注・同門として澧水に出句料を無心した)等申上候処御承知入貴覧候。御一笑希候。御社友様へ可然御通声可被下候。右之御礼早々治泉(私注・虎杖膝下の執筆・上田市神畑の人・横山治左衛門)遣申候。尚、追々便御待申事ニ候。急立早々以上。

後六月廿日

裕着て昼過までの日和哉

ミな月やさ月おくれのわすれ雨

恥入斗候。二白。此程江戸より白尾坊昨鳥門人と申者ふたり迄被参、此昨鳥と申者何者なるや。葛叟(私注・春秋庵主倉田葛三。虎杖、白雄門)よりも不申来、其堂(江戸の白雄門・

春秋庵主になったこともある)三千彦(江戸の白雄門・鈴木道彦)よりも何とも申不来、扱々変人ども星布婆々望之取持杯と申様子、伯先(信州伊那の白雄門・中村元茂)など大ニ怒居候。春秋庵再建、先いらぬ事也。夫ニてよき人か御様子御しらせ可被下候。

虎杖はすでに澧水の序のある『俳諧発句五百題』を見ていたから『犬樞集』送付の折に昨鳥の正体を問いただしたのであろう。江戸の葛三や道彦などが虎杖に連絡しなかったのは、鳥酔時代からの古参榎本星布の立場をはばかったからであろう。白雄門の長老として一門の間に重きをなしていた虎杖も俳歴からみれば星布には頭が上がらない。この星布の後楯があれば加舎白雄本人とまちがうような大仰な俳号を名乗ることも可能である。星布は俳諧史の中でも特に秀れた業績を残した閨秀作家の1人であるが、晩年にはこのような甘い一面もあったようだ。

『増訂新撰俳諧辞典』(岩本梓石、宮沢朱明編、昭和2年刊)中「俳諧人名譜」は時折類書にない目新しい記事を載せる文献だが白雄房昨鳥について次のような貴重な記載がある。

白雄(二世) 或は白雄坊昨鳥と云ふ。一号は酔石館、江戸麻布竜土に住す。師歿後星布女などにて取立しと云ふ。書は先師に似たりと。発句五百題を世に出せしは此人なり。

昨鳥の書は『俳諧発句五百題』でみるかぎりあまり白雄に似ているとはいえない。

昨鳥は星布ら中興蕉風の流れを汲みながら江戸座点取に傾斜し、文化8年(1811)から同10年までの『俳諧鐫』20編、21編、22編3部にその名を載せている。飯島花月は『俳諧鐫』管見(注5)の中でこの白雄を加舎白雄その人と混同しているが、年代からみて別人であることは明らかである。『俳諧鐫』は江戸座及び江戸の売れっ子宗匠の高点句集で、その宗匠の所属する派や点印・好みの傾向までも併せ紹介している。明和5年(1768)に初編が出て以来天保2年(1831)頃までに30余編が刊行された。編者は3編までは三世湖十門の芙蓉山雪成、4編以下は板元の花屋久次郎(二代雪成)である。20編下にある昨鳥の項をざっと紹介してみよう。

白雄房      蕉門白雄房側      昨鳥

(上段一好みの傾向)附三句のわたりはいふもさら也。とかく一卷のはこび第一也。当時世に用るきゝ道具という物なし。されど源氏物語、伊勢物語、古今、つれづれ、竹取すべて物語物よし。てには留よし。蕉翁七部をワたる方よし。

(下段一高点集) 前句      すだれのはつれ陽炎の立

春風に舞の足取あでやかに

綾瀬の秋を侘つくす月

くつきりと顔の白きを灯に

草木を染る風の吹出す

弦さしの乱葶洒す月夜さし

水鶏なくほど出かゝる月

一ツある小粒を呉て酒もらん      (以下略)

22編では好みの傾向を「強弱交るべし。経文の事。買色手強かた。雪花菜汁。猫、鴉猫尤よし。悪紙。いづれ付に依て高点有」とも紹介している。投句者は本書をみて高点をねらったのである。『俳諧鐫』に出るからといって特に蕉風から逸脱したというわけではなく、本

書に名を見せること自体が昨鳥の江戸庶民への人気の高さを示しているようである。鈴木勝忠氏は「一茶調の母体—その浮世風について—」（注6）の中で当時の俳諧の実態を、1)趣味俳人（遊俳）、2)純俳業俳、3)江戸座点取（業俳）の3つに分類されているが、昨鳥は2と3に涉って活動をもったことになる。当時流行した正風俳人番付などで昨鳥の評価が低いのは、この種の番付が1、2を中心に編成されているからである。2に属した一茶が、2、3に属した八巢蕉雨を軽蔑したのは当然である（蕉雨は『俳諧鍋』にしばしば名をみせている）。

文化9年（1812）一茶の友人根本一峨の今日庵再興集『なにぶくろ』（半紙本1冊）に次の昨鳥の発句がある。一峨は葛飾派の俳人だが一時江戸座の点者になったことがあった。昨鳥の句をのせたのもそうした縁からであろう。

稲妻や五十を越せばあぢなもの 昨鳥

作品の真実と作者の体験を安易に混同してはならないが上記の句には作者の感慨がみえるから文化9年頃すでに知命をわずか出ている様子である。いま便宜的に文化9年50歳として逆算すると宝暦12年の生まれになるから年齢的には白雄直門としてもおかしくない。

昨鳥は天保以後に加舎白雄の所持していた「昨鳥」「舎在春秋之名」の1石両面2顆の印章のうち「昨鳥」の部分の時春秋庵主梅笠より譲られている。これは松宇文庫蔵『祖翁一代俳諧』（後補題簽による。注6）の巻末余白に記された覚書によって明からである。関係部分のみを引用する。

「昨鳥」ノ印、「舎在春秋之名」ノ印一材両面。テン印ニ「累良質為瑕」ト云印。此印二顆天保ノ年間春秋庵主梅笠。此印（私注「昨鳥」「舎在春秋之名」の両面一石の印）割而昨鳥・無底申請候。嘉永二酉六月十八日春秋菴（私注・梅笠）入来。十九日、廿日、廿一日無底入門スル。海菴ニテ木下ヤミ、夏ノ夜ノ半歌仙。廿二日アフチ来ル。春秋菴、あふち、無底トモツレダチ横山川口清幽方ヘユク。（下略）

この文（嘉永2年に書かれたらしい）では昨鳥が「昨鳥」の印を貰ったのがいつであるのか不明だが、梅笠の春秋庵在世は天保末年から文久3年（1863）6月までであるから梅笠から譲られたことはまちがいない。無底はもと八王子裁判所近くに句碑のあった無底坊是三であろう。印についていえば『俳諧発句五百題』の昨鳥序に捺した「志良／尾坊」（白文方印、2行）と「昨／鳥」（陽刻方印）の印は白雄が生前に使用していたものに酷似する。版本であるから同一のものか確かめようもないが白雄没後星布の手を経由して昨鳥にもたらされた公算も大きい。

今日最も加舎白雄と混同されやすいのは以上述べてきた白雄房昨鳥である。加舎白雄は安永8年（1779）頃から「白雄（坊）」を頻繁に用いだし、従来の「白尾（坊）」や「昨鳥」はまったく使わなくなる。したがって加舎白雄の真蹟にかぎっていえることは新旧の雅号が入り混った「白雄房昨鳥」という署名はこの世に存在しないのである。巷間たまたま二世白雄の筆蹟を目にすることがあるが加舎白雄に似せようという意図はまったく認められない。その点からも一世二世の判別は容易である。

加舎白雄のすでない文化6年江戸の人槐陽井躬之の増補刊行した『増補俳諧所名集』（小本2冊）の和泉の部に故人の作として昨鳥の1句を載せている。

冬枯や葛のうら葉に狐なく 昨鳥

加舎白雄の句は「白雄」の号で同書（相模の部）に載っているから二代昨烏・加舎白雄以外にもう1人同名異人がいたことになる。加舎白雄の作品中には上記の作は目下のところ見当らない。

## 5. 結 論

加舎白雄の同名異人は、「白雄」号の場合、生前・出生前に3名、没後に6名、「白尾」号の場合、没後に2名、「昨烏」号の場合、生前、出生前に1名、没後に1名と都合13名ほどいた。これらのうち最も混同されやすいのは化政期に二世白雄房昨烏を名乗って江戸の点取俳諧に人気のあった人物である。没後公刊された加舎白雄の著作を含め、短冊、条幅等による白雄作品収集の際には慎重なる検討が必要といえる。

## 注

- 1, 拙稿「信濃雑俳書解題」16。「川柳しなの」441号。昭和54年12月発行。
- 2, 柏崎市立図書館蔵。関甲子次郎編『柏崎文庫』。寛延元年刊『浄土念称決疑編』（4巻1冊）を編んだ白雄はこの人か。
- 3, 「志ら雄」号の初見は安永3年3月、上田市別所の北向観音堂脇に建てた芭蕉塚建碑の文である。
- 4, 豊水子孫所蔵。石井光太郎氏教示。
- 5, 『花月随筆』所収。富山房刊。昭和8年9月発行。
- 6, 「連歌俳諧研究」39号。昭和45年10月発行。
- 7, 本書は半紙本1冊、30丁。寛政10年10月冥々序。寛政11年1月星布跋。巻頭に伝芭蕉の松島独吟を掲げる。「祖翁一代俳諧」はもとより後人の仮題である。ふつう世にいわれる「芭蕉翁松島独吟」が正題か。松字文庫本（家集№9）は、その蔵書印より松原庵の旧蔵本であることがわかるが、さらに表紙見返しには「桑都 昨烏庵所蔵」の7文字がみえる。昨烏庵がいつ頃からあった庵号かは未調だが、昭和初年には八王子（桑都）に昨烏庵佳森という星布の流れを汲む俳人がいた（桑都ゆたか会「ゆたか」第百四十三回）。この庵号と星布の庇護をうけた白雄房昨烏とは何らかの関係があるはずである。